言語における主観性再考―非現実事態を語るはずのモダリティがなぜ現実事態を表わすのか？

上智大学博士後期課程言語科学研究科　言語学専攻
井上大輔

モダリティに対するとらえ方は、大きく二つに分けられる。一つは、文を命題＋モダリティに分類し、文に含まれる主観的要素をモダリティとみなす考え方である。もう一つのとらえ方は、命題の値が真か偽かを議論の対象とする modal logic から発展したもので、命題の真偽、実現の可能性、または必然性を話し手の主観に基づいて表現するものである。前者は日本語学やフランス語学、後者は英語学で主流となっているアプローチである。

だが、実際には英語におけるモダリティ表現の代表とみなされる助動詞においても、後者の「非現実事態を語る文法手段」であるとする定義からは説明できない用法が多々観察されている。例えば、It's surprising that John should fail the exam.の that 以下は現実を表しているが、なぜ should が使われているのであろうか？　このように、現実性や事実性からモダリティを捉えるだけでは説明できない用法は、英語だけでなくフランス語やスペイン語でも散見される。

上記のような、現実性や事実性を表すモダリティの用法に対する説明は、通常主張と日主張の観点からなされることが多い。上記のケースでいえば、他の結論が存在することを否定しない助動詞 should を使うことで、話し手が前もって John should not fail the exam.という命題を信じていたということを伝えるということである。こうした用法が拡大して、That John should have failed his examination proves that he has not studied enough.のように、話し手が前もって前提としている命題であり、会話における旧情報を伝えるときにも助動詞 should が使われることがある。

これは、本来であれば話者から見た命題の実現可能性という表すための表現手段が、聞き手にどのように情報を伝達するかを考慮するための手段として使われているということになるだろう。言い換えれば、話者が文脈や聞き手の認知環境を考慮に入れた上で、文章を構築しているということである。

つまり、現在モダリティに分類されている表現を理解するためには、Benveniste の定義した「ここ、今、私」という談話空間において、話者が世界をどうとらえているかという視点だけでは不十分であり、対話において必然的に生じる対話者が世界をどうとらえているかを話者が推測し、そしてそれを言語に反映させるという観点からも主観性をとらえる必要があるのではないだろうか？

本発表では、英語、フランス語、スペイン語などの用法を参考にしつつ、主観性について改めて考えていくことにしたい。